

---

# オレと強敵と勉強会

NYO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレと強敵と勉強会

### 【Nコード】

N10270

### 【作者名】

NYO

### 【あらすじ】

突発的テキスト小説第六弾。ムッツリーニ主人公。

夕風が少し肌寒くなってきた季節。窓の外には活気に溢れた景色が広がる。

オレには縁のない部活動だ。

いや……縁のないと言つのは言いすぎか。夕暮れの中、朝露のように清楚な汗を流す女性はとても絵になる。売上の方も健全な物なのかでは良く売れる。

再び毎日の日課であるカメラの整備にいそしもうとしていると、

「ムッツリー二君」

秋風が舞い込む古びた教室に似つかわしくない声が響いた。

「……………工藤か」

教室の扉の前にはAクラスの工藤愛子が佇んでいた。

可愛い利発さと、艶のある表情を良い感じで混ぜたような面立ち。

色素の薄い髪が透き通る瞳と合わせり、心地よさを醸し出している。

「……………何のようだ」

「そんな言い方しないでよ」

錆びついた扉を丁寧に閉め、軽やかな足取りでオレの方に近づいてくる。そして机を挟んでオレの反対側に腰をおろした。

「ねえ最近変わったことがない？」

少し妙な言い回しだ。物事ははっきり言うような奴だと思っていた

が……。  
最近変わったことか。そう言えば木枯らしが突然吹いてパンチラをしやすくなったな。

「……………綿パンというのを見なくなってきた」  
「そうじゃなくて」

工藤が呆れた表情で肩を落とす。何か間違えていたのか？

「ほら、何か気付かない？」

工藤が立ち上がりその場で一回転をする。短いスカートが風をはらんでふわりと揺れた。  
ふむふむ。なるほど。

「……………今年はピンクが流行（ボダボダ）」  
「ちがうよっ！」

決して恥ずかしくなったりしないのが工藤らしい。  
慣れた手つきで鼻血を止めながら思考を巡らすと、工藤が何を言いたいのか分かった。

「……………衣替えか」  
「そう！」

机の上に身を乗り出しオレの鼻先に指を突き付ける工藤。  
たしかに衣替えは重要な出来事だが、そんなに興奮するだろうか。

「あのね」

夏の方が露出面が多いが、冬の方が安心して居るためかガードが甘くなる。恥じらった表情を浮かべながらスカートを正す姿も売れ行きとしては好調なのだな。

体育の時に色気が無くなったのは残念だが、大島先生はオレの盗撮を禁止しているから自動撮影の写真しかない。そして心を持たない機械で撮られた写真は何の感動も無い。だからそこまで

「聞いてるっ!?!」

「……………!! (コクコクコクコク)」

いまのは驚いた。まさかコイツがこんな剣幕をするとは。

「ムツツリー二君さ、保健体育の教科書持つてる?」

オレはすぐさま聖書バイブルを取りだした。ろくに抵抗もしないのは、クラスの友達が”女性は怒らすと命にかかわる”と身を持って教えてくれたからだ。工藤はそれを奪い取るように受け取って、

「教科書に書いてある事だけじゃ……………って、ものっすごい数のアンダーラインだよっ!?!」

「……………(ぶるぶる)オレのじゃない……………」

「自分の鞆から取り出したのに言い訳するんだ」

めんどくさい奴だ。こういう時は話を促すにかぎる

「……………続ける」

「あ、うん。ムツツリー二君はさ実技が弱いからボクが教えてあげようと思って」

「……………そんなことはない」

「じゃあ、ボクに勝てるんでも?」

「……………お前に教えてもらおうことなどない」

オレは予定していたカメラの整備を切り上げ、鞆を肩に担ぎあげた。これ以上作業が遅くなつては、明日の仕入れに影響がでる。

「ボクに負けるのが怖いのか？」

廊下に向かって歩き出したオレの背後からそんな声が聞こえてきた。行為に勝ち負けなどない。そういう言い方をしてくるといふ事は、おそらく行為の最中の知識を聞いているのだらう。

「……………なんでも出してみる」

ふん。確かにオレは実技じゃ弱いかもしれないが、知識だけならコイツなど足元にも及ばん。

手順と理論だけならオレの頭の中には隅から隅まで入っている。こいつに負けることなどない。こいつの鼻を挫くいい機会だ。

「じゃあ、だすよ」

工藤は教科書を開く素振りを見せずに口を開いた。なら、なおさら負ける要素はない。例えどんな問題が出されてもオレは簡単に答えで

「Cカップのブラジャーのホックの数はだいたい何個だ？」

「……………」

「あれ？もしかして答えられないのかな？」

意地悪そうな笑みが向けられる。『にまっつ』という擬音が似合いそうだ。

小悪魔顔の工藤は笑みを保ったまま、オレに向かって耳を付きだしてくる。揃えた指をわざとらしく耳に当てて。

「……………わから……………ない」

「え？ なに？ 聞こえないな？」

ここぞとばかりにオレにちよっかいを出してくるくそっ！ オレを弄んでなにが楽しいんだ。

「お願い……………します。……………教えてください」

強く齒軋りしながら下げたくない頭を下げる。

「そっ？ じゃあ始めよっか！」

「……………(コク)」

まさかコイツに頭を下げて勉強を、しかも保健体育を教えてもらうとは……………。不覚だ。

「別にね。さっきのは意地悪で出したわけじゃないんだよ。いざ本番、ってなって慌てちゃうと色々と困るからね」

早く続きを話せ、と内心で思いながらも心の中に留めておく。

「じゃあ、まずはスカートからね」

「……………スカート(ボダボダ)」

「これぐらいで鼻血を出されると困るんだけど？ やっぱまた今度にしようか？」

それはマズイ。こんな屈辱一日でも早く抜け出したい。

「……………死んでも、やる（ピタッ）」  
「……………ホントに死なないでね」

気合いで鼻血を止めると、工藤は喜んだりせず逆に心配そうな顔つきをしていた。

安心しろ。常に二桁ほどの輸血パックが鞆の中に在中している。

「じゃあ、はじめるよ？」

その声をかけて工藤は上着を少し捲る。スカートと上着の間から健康的な小麦色のお腹が見えた。くびれた腰がスタイルの良さを象徴している。

「スカートの脱がし方なんだけど……………まずは一回引っ張ってみて」  
「……………オレに脱がせと言うのか!？」

こいつはオレを殺す気か!？

「うん。どうせ無理だし」  
「……………いいだろう。後悔するなよ」

…コイツはオレを男だと認識しているのか？  
そんな疑問を抱きながらスカートとお腹の間に手を入れる。自分のズボンと違って、相手のを脱がせる場合には尻の方から滑らせるようにする必要がある。

グイッ

「どうしたの？」



「……………」

グイッ

脱がせられない。大見得を切った手前、簡単に諦めるわけにはいかない。

ふむ、理論はあっているはずだが。

……まさか、わざと小さめのスカートを履いているのか？

「もういいや。手を抜いて」

自分の無力さを噛みしめた瞬間だった。

手を抜いて彼女の方を見ると、わずかに緋色が混じった鮮やかな陽射しが彼女の頬を赤く染めている。

「スカートってね、ウエスト部分にホックがあって、そのまま引き下ろしてもヒップに引っかけちゃうの」

身体を左に回してこれみよがしにホックを見せつけてくる。見るとその下にファスナーも付けられていた。おそらくこれがつつかえていたんだろう。

「ホックを弾き飛ばす勢いで引き下げれば脱げないことも無いんだけど……………」

「……………安心しろ。そんなことをやるつもりはない」

「そういうところは尊敬してるよ」

女性の泣き顔など撮っても心が痛むだけで、何の感動も無い。フィルムと時間のムダだ。

「それでね、女の子のスカートってホックは体の左側にあるんだよ」

「……………なぜだ？」

「右利きの人が止め外しがしやすいようになんだよ」

ハサミとかと一緒に。だとすると、いずれ右側についているのもでるかもしれないな。

「左側に無い場合は、正面かお尻のところにあったりするんだけど、絶対に言えるのは普通は右側には無いってこと」

工藤の言う事を一言一句メモしていくオレ。手の速さだけは姫路にも負けない自信がある。

「普段の勉強もそれぐらい真面目にやればいいのに」

「……………ほっとけ」

「じゃあ、次行くよ」

ブラウスのボタンを上から二つだけ外し下着を露出させる工藤。  
……………ってちよつと待て！！

「……………お前は何をやっている！？（ドバツ）」

とりあえずまずは止血と輸血だ。このままでは負け犬のまま人生が終わってしまう。

「他の人の前じゃやらないんだから」

工藤が何か言ってる気がするが、オレは血を止める作業で手いっぱい。聞き返す時間さえ惜しい。

「もう大丈夫？」

止血は終わったので輸血作業に勤しんでいると、地獄への誘いが聞こえてきた。

……そうか、保健体育一位のオレがいなくなれば自動的にコイツが一位になるのか。

「……………オレは、負けない」

だが絶対王座の椅子は渡さない。渡す時は、オレが命を落とした後だ！

「えっとね、ブラにも色々なタイプがあって、バストが大きい人なんかは全体がスッポリはまるタイプの物でいいんだけど、ボクや島田さんなんかはそれじゃダメなんだ」

なかなか苦労しているんだな。まあ、分かりたくもないが。

「で、ボクが気に入ってるのはこれかな？」

わずかにオレの方に近づいて鎖骨部分からブラをちよつとだけ見せる工藤。

ブラの色はショッキングピンク。可愛いデザインで品がある。

「普通のはフルカップって言うんだけど、これはハーフカップって言って小さな胸もふっくら演出することが出来るんだ。少し屈むと先端が見えちゃうから注意しなきゃいけないんだけどね」

得意げにいう工藤だがオレはそれどころではない。鼻血をこらえるのに精いっぱいだ。

「……………続ける」

このままでは輸血パックが無くなってしまふ。

「そ、そう？　じゃあ次行くけど」

プチッ

ん？　なんの音だ？　下の方から聞こえたが。

その後聞こえてくるパサッという布切れの音。オレと工藤は一旦目を合わせ、無言で下を見下ろした。

擦り切れた畳の上に先ほどまで見ていた布切れが落ちている。その近くには、柔らかい畳に落ちて落ちた音が聞こえなかった金具も落ちていた。

そしてオレたちの視線は再び一点に集中することになる。

「キヤアアアアッ！！」

どうやら工藤もこの状況は初めてだったようで、うぶな乙女のような悲鳴をあげて制服の上でパンツを隠した。元々スカートの上だけを隠す長さしかない布でその下まで隠すとなれば、必然的に体勢を前かがみにするしかなく、

「……………（ブシャアアッ）」

その行為はオレを死に至らしめるに十分過ぎた。

「ムッツリーニ君！？　ムッツリーニ君！！」

最後にオレの視界に入ってきたのは赤い彼女の下着。

薄れゆく意識の中

『金輪際工藤愛子とは勉強をしない』

そう心に誓った。

(後書き)

前の後書きでは優子主人公っていいました。ごめんなさい。

ムツツリーニの性格に若干………というかかなり雄二の性格が混じりました。がそこまで違和感はないと思います。

本編無視して短編を書いている作者を見捨てないでください。お願いします。

最後に、充様、アイデア提供ありがとうございます!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1027o/>

---

オレと強敵と勉強会

2010年10月30日13時52分発行